

令和紙



おりおりの記

アメリカにまとりつかれた半生 ～『戦後レジームからの脱却を』を著わす～

西日本シティ銀行
特別顧問

久保田勇夫

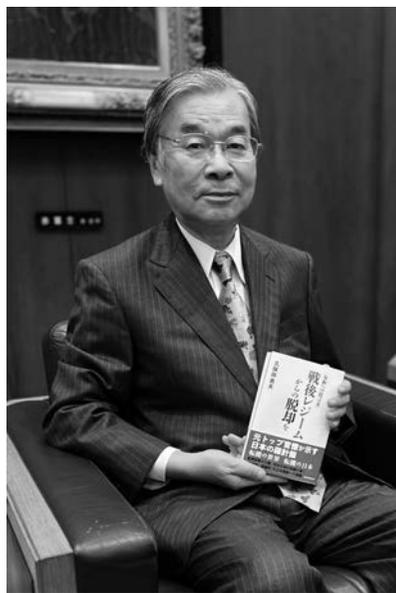
昨年、十二冊目となる『令和への提言Ⅱ―戦後レジームからの脱却を』（産経新聞出版）という本を著わした。大袈裟な書名としたが、「一筆両断」という産経新聞の九州・山口版に掲載してもらったエッセイの一部を収録したものである。

どれを採り上げようかと、それまでこの欄に書いたものを読み返しつつ気づいたことがある。それは、私のこれまではアメリカにまとりつかれたものであったということである。

私の最も幼い頃の明確な記憶は、第二次大戦末期、米軍による福岡大空襲の際のものである。空襲警報のサイレンを聞いた父は、弾除けのつもりであろう、母と私に冬用の厚い布団をかぶせた。その中で母は、かつてその父の傍らで誦じたという「観音経」を唱えて、われわれの身の安全を祈った。調べてみると昭和二十年六月十九日のことであり、私が二才半の頃である。私が育った粕屋郡和白村（今は福岡市である）には、かつて「雁ノ巣飛行場」と呼ばれた民間空港があったが、それは敗戦後「ブレイディー空港」と名を変え、占領軍の基地となっていた。小学四年生の時、私はその米軍のジープにはねられ生死の間をさまよった。

東京大学法学部では、田中英夫教授の「英米法」のゼミに参加した。同教授のかつての指導教官は、ブレイクニー氏と聞いたが、同人は極東軍事裁判において日本人被告の弁護人であったことが後でわかった。大蔵省に入ったが、その後半の大部分

は国際部門で仕事をした。「日米円ドル委員会」、「日米構造協議」、「日米金融サービス協議」と八〇年代から九〇年代前半まで多くの日米金融交渉にかかわった。「金



融サービス協議」では日本側の議長として後に財務長官となるガイトナー氏と厳しく対峙した。その後、故郷である福岡に戻り、地方銀行の経営に従事し、その関係は薄れたが、それでも金融のグローバル化に伴い、アメリカの金融政策や金融情勢を知ることは必須であった。

この本では、「戦後レジーム」を「わが国が第二次大戦後の占領下に、恐らく外部からの政治的意図に強く影響され、十分議論されずに作られたと思われる法制度及びこれを支えた考え方」と定義した。これからの脱却を説いたこの本の題名は、アメリカにまとりつかれた私がたどりついた結論だったようだ。